平成 27 年度　森林・山村多面的機能発揮対策

活 動 事 例 集

目次

No.	所在地		団体名	活動タイプ					掲載頁
				里山	竹林	資源	機能	教育	
1	岩手県	紫波町	紫波地区里山林保全活動実践協力会	●				●	2
2	宮城県	仙台市	権現森自然研究会	●				●	4
3	秋田県	能代市	ニツ井宝の森林（やま）プロジェクト			●			6
4	群馬県	藤岡市	桜山きづきの森	●		●			8
5	東京都	あきる野市	あきる野菅生の森づくり協議会	●		●		●	10
6	埼玉県	所沢市	狭山丘陵の森レスキュー隊	●				●	12
7	神奈川県	横須賀市	NPO 法人三浦半島生物多様性保全	●	●			●	14
8	岐阜県	各務原市	NPO 法人　竹林救援隊	●	●	●		●	16
9	静岡県	静岡市	麻機自然体験コミュニティ「Balance」	●	●				18
10	愛知県	瀬戸市	特定非営利活動法人　海上の森の会	●	●	●	●	●	20
11	三重県	伊賀市	伊賀の里山整備・利用を考えるグループ	●	●			●	22
12	滋賀県	長浜市	山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会					●	24
13	京都府	京丹後市	京丹後木の駅実行委員会	●				●	26
14	和歌山県	橋本市	河和の森　保全の会	●	●	●		●	28
15	岡山県	津山市	NPO 法人倭文の郷	●	●	●		●	30
16	広島県	広島市	美鈴恵みの森づくり		●	●	●	●	32
17	高知県	南国市	白木谷ゆめクラブ		●				34
18	福岡県	直方町	金剛山もととり保全協議会	●	●				36
19	宮崎県	木城町	駄留地区鳥獣被害対策協議会	●	●			●	38
20	鹿児島県	南九州市	知覧町たけのこ振興会		●				40

活動内容： あるものを活かした里山再生で人も地域も元気に

団体名：紫波地区（しわちく）里山林保全活動実践協力会

活動タイプ		活動場所：岩手県紫波町（いわてけんしわちょう）ほか周辺地域
○	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

岩手県央部に位置する紫波町（しわちょう）では、担い手の減少や高齢化など、森林・林業をめぐる社会情勢の変化から人と森との関わりが希薄になり、放置され荒廃する山林が増加傾向にある。荒廃した里山にかつての人の関わりを取り戻し、本来の明るい里山景観を再生するための「担い手と里山を橋渡しする中間支援組織」として、平成 25 年に紫波地区里山林保全活動実践協力会を設立し、協力会自らが本交付金を活用した活動を行うとともに、思うように事務が進められず苦労している他の活動組織等を支援する活動を行っている。

地域の実情に即した里山再生（地域環境保全タイプ）

町の史跡や観光文化施設周辺の森林について、長年整備がされていない状態であった。そこで山林所有者等との調整を図りながら山林の整備を行った。散策路が整備されたことで、地域住民が自由に山に入って散策できる環境が整った。

▲信頼関係を築くうえで欠かせない「関係者が膝をつき合わせて話し合う場づくり」も支援

地域にある人と資源を活かす（教育・研修活動タイプ）

県の地域協議会などと連携して、山林所有者や地域住民が自ら間伐等の林業作業の経験を積む機会を提供している。

活動状況・成果

里山整備の効果が周辺の里山にも波及

長年放置され藪に覆われ、存在もほとんど知られていなかった町の史跡や、過疎化、高齢化で手が回らなくなった地域の神社の山林を、公民館や町内の団体と連携し整備したことで、地域住民の森林

への意識が高まり、史跡や神社周辺の荒廃した里山の整備も進んでいる。同様に、長年放置されていた山林（町の観光拠点「野村胡堂・あらえびす記念館」の裏山）で伐採と下草刈り等による整備を行ったところ、その動きに触発されて周辺の里山でも森林組合との連携による整備が進むなどの好影響が見られた。

▲地域の神社の参道周辺の整備により住民の入山が楽になった

活動の自立に向けた担い手の育成（教育・研究活動タイプ）

町内の芳沢（よしざわ）地区では、活動に参加する地域住民を対象とする林業技術の現場研修を通じて担い手を育成し、地域住民による里山管理が可能な体制づくりを支援している。同地区では、修得した林業技術を活かした林業作業の受託や、伐採木の販売などによる新たな雇用創出に向けてコミュニティの結束が高まっている。

▲作業ノウハウを継承する機会を増やして新たな担い手確保に努める

中間支援を契機に拡大・波及する里山再生

県の地域協議会との連携の下、本交付金を活用した町内の活動組織の支援として、交付金を活用した取組の相談、組織間連携の調整、説明会の開催等の幅広い取組を行っている。その結果、取組面積は 3 か年で約 40 倍に急増した。事務支援に伴う費用は、支援先の活動組織が受けた交付金から事務経費として支払われている。〔支援内容の推移：平成 25 年度 1 団体 5.5ha → 平成 27 年度 16 団体 241ha〕

特徴的な取り組み

人と里山とのマッチングを通じて地域の課題を解決

交付金申請に係る事務作業から、交付金を活用した地域振興の取組の実施に伴う相談に到るまでワンストップで支援するなど、活動組織でありながら地域協議会と同様の役割を果たしている。支援活動に際しては、県の地域協議会と緊密に連携をとりつつ、活動組織の視点に立って、現場目線で細やかなサポートを行っているのも特徴である。また、本交付金を活用した里山再生の取組を契機に、森林組合による造林事業に発展した事例や、休眠状態にあった林業活動組織が再結成した事例があるなど、周辺地域や他の主体への波及効果は大きい。

▲交付金の申請から里山の利活用に関する相談までをワンストップで支援

成功を生んだポイント

県内の活動組織や、本交付金の申請を予定している地域団体からの「身近な相談窓口」の役割を担っている。地域の里山や、里山に関わる当事者が抱える課題を丁寧に洗いだし、その地域の実情に即した実現可能な課題解決策を提案することで、取組を着実に実行に移せている。地域の「放置された里山を何とかしたい」という思いを形にするために、資金面の支援は本交付金で、マンパワーやノウハウ面での支援は県の地域協議会や森林組合等とも連携を図りながら支援を行っている。

活動内容：地域共有の財産として豊かな権現森を将来に伝える

団体名：権現森（ごんげんもり）自然研究会

活動タイプ		活動場所：宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

権現森（ごんげんもり）は仙台市西部に位置する約 200ha の国有林で、地域の憩いの場として優れた景観を有し、環境教育の拠点となる森林として林野庁の自然休養林と、仙台杜の都緑の 100 選に指定されている。権現森自然研究会は、平成 18 年に仙台市の市民センター主催で開催された里山保全に関する講座の受講者有志が中心となり、権現森の保全と持続的な利活用を目的に設立された。本交付金を活用した里山整備は平成 25 年度より開始した。

身近な里山の保全作業の実施（地域環境保全タイプ）

権現森にある 5 コースの遊歩道を整備し、下草の刈払い、倒木や枯損木、危険木の除去、歩道路面修繕などの管理作業や、樹名板の設置、手作り木製ベンチ設置、安全パトロールなどを年間通して定期的に行っている。

多様なプログラムで幅広い層に対応（教育・研修活動タイプ）

近隣の学校や町内会、市民団体などを受け入れ、各団体のニーズに即した自然散策や体験学習などの多様なプログラムを企画・実施している。また、広く一般を対象とする自然観察（カタクリ、キノコ、紅葉など）や市の市民センターとの連携による里山講座などを企画するなど、幅広い層・ニーズに対応している。

▲人気の高いカタクリ観察会

活動状況・成果

権現森の再生（地域環境保全タイプ）

活動当初の権現森は樹木や竹、下草が密生する藪が広がっていたが、概ね週 1 回のペースで森林整備等の作業を継続することで、安心して歩ける散策路を維持している。林内が明るくなったことで、

地域住民が散策や犬の散歩などで日常的に利用する機会が増えた。散策や各種取り組みなどへの参加を通じて、権現森に対する地域の関心が高まり、保全管理作業への理解・協力を得られやすくなった。

▲遊歩道の下草刈り、枯損木の除去等の維持管理作業を定期的に実施

▲森に関心を持っていただくしかけとして樹名板を取り付け

地域の子ども達が森に触れ親しむ機会の提供

教育・研修活動タイプの参加者については、地域の市民センターを事務局とする子育て支援のネットワーク組織や、地域の保育所や児童館、小・中学校等と連携することにより、園児の自然体験や、学校林の整備、理科や総合学習の時間を活用した自然観察や体験登山等など、多い時には100名前後の規模の受け入れを行っている。

安全管理の徹底

チェーンソーや刈払機の使用に際しては、安全講習会の参加者を中心に作業メンバーを固定し、作業時には安全確認を行うメンバーを配置している。また、初夏から秋にかけてのスズメバチの活動時期には、参加メンバーや取り組み参加者の間でスズメバチに遭遇した際の対処法を共有するとともに、遊歩道沿いや作業場所の周囲にメンバー手製のスズメバチトラップを設置する等の安全対策を講じている。

▲地域の子ども達も積極的に受け入れている

特徴的な取り組み

地域の子ども達を積極的に受け入れ

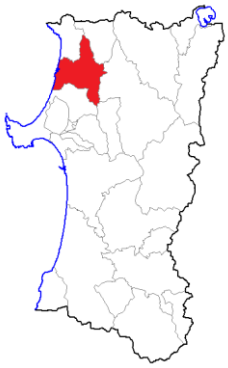
近隣の児童館や保育所、小学校、中学校が課外活動や授業などで継続的に権現森を利用している。同会では散策や自然観察など、年齢層や各団体のニーズに応じた体験型のプログラムを企画・実施しており、多い時には一度に100名前後の子どもを受け入れることもある。また、職場体験の一環として、中学生対象の森林作業体験なども実施している。権現森の大切さや魅力を子ども達にも理解できるように分かりやすく伝えることで、森林・自然に対する子ども達の興味・関心を高め、将来の担い手の確保に繋げることを意図している。

成功を生んだポイント

会設立のきっかけとなった市民センターを活動拠点にして、幅広い年齢層や団体のニーズに合わせた体験型プログラムを企画・実施している。市民センターとは地域の様々な世代や団体間の交流を進めており、情報発信や新たな連携先の確保などで連携している。活動に際しては地域の森林管理署（「遊々の森」の利用協定）、仙台市（里山保全に関する団体登録制度「緑の活動団体」への登録）と連携している。

活動内容： 身近な森林は宝の森林

団体名：二ツ井宝の森林（やま）プロジェクト

活動タイプ		活動場所：秋田県能代市
	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
	森林機能強化	
	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

能代市二ツ井町（旧 二ツ井町）はかつて秋田杉の一大産地として栄えた地域である。本プロジェクトの対象地である二ツ井町梅内地区には約 1,900ha（うち、市と協定を結んで管理している集落林 700ha、個人所有林 1,200ha）のスギ林を主体とした森林が広がる。木材需要の低下や安価な外材の輸入拡大などに押される形で地域の林業の元気がなくなり、間伐等の適切な管理が行われずに放置される森林が増えていた。その一方で、昭和 40 年代に植林したスギの多くが伐期を迎えていた。

こうしたなか、林業の月刊誌の記事をきっかけにして、木の駅プロジェクト※の取り組みを二ツ井宝の森林（やま）プロジェクトとして平成 24 年度から開始した。平成 26 年度からは本交付金を活用して、梅内地区の森林のうち、大区画での集約的な林業が困難な森林などを対象に森づくりに取り組んでいる。また、機材（薪割り機）購入に際しては市から助成を受けている。

※事前に登録した作業者が伐採・搬出した樹木を決められた場所に搬入すると、森林組合等を経由してその材が販売される。作業者は、売上の対価として地域の加盟商店等で使用できる地域通貨の交付を受けるしくみ。

身近な里山は宝の森林（森林資源利用タイプ）

本交付金を活用して、地域のスギ林 70ha や雑木林 6.5ha を間伐・搬出し、薪として利用する取り組みを行っている。スギ林から搬出した材は薪材として外部に販売し、雑木林から搬出した材は集落内の各家庭用の薪として利用している。

▲林内での作業風景

活動状況・成果

集落林、個人所有林の間伐が進む（森林資源利用タイプ）

これまでに杉林の間伐で、チップ材・薪材として 460 トンほど出材したほか、各家庭用の薪材を得るために集落の雑木林の間伐を 6.5ha 実施した。チップ材については市内のバイオマス発電所や火力発電所に販売しているが、より付加価値が高い薪材として販路の確保に向けた取り組みも始めた。平成 27 年は 8 棚（約 64 ㎥）の薪材の収穫があった。

本交付金の活動のほかに、地元の二ツ井小学校の 3 年生を対象に実施している森づくり活動ではシイタケやナメコの植菌、学習林の枝打ち作業、モミジの植樹など年間を通じて多様なプログラムを提供している。

▲搬出した材はバイオマス発電所などに販売

安全管理の徹底

作業前には安全点検を実施し、作業時には安全靴やチェーンソーパンツ等を着用している。チェーンソー作業に関わるメンバーは安全講習会への参加や傷害保険への加入など、安全対策には細心の注意を払っている。

▲地域の小学校を対象に様々な環境教育プログラムを実践。

▲チェーンソー講習会（学科及び実技）の受講風景

特徴的な取り組み

楽しみながら活動を持続するしくみ

間伐等で搬出した材をチップ材として販売し、地域通貨を対価として受け取る木の駅プロジェクトを導入したことで、地域の住民や商店等を巻き込んだ地域全体の動きにつながった。また平成 27 年度には、木の駅プロジェクトの取り組みに着想を得て、スギ林を活かして付加価値の高い薪づくりの取り組み（薪づくり倶楽部）が始まった。これまで 20 名弱だったメンバーが、本交付金を活用した取り組みの組織化により、総勢約 50 名に増加した。

成功を生んだポイント

明治時代から集落をあげて植林に力を入れるなどの歴史的背景もあり、また、梅内聚落（あつむおち）（聚落の自治組織名）の役員が二ツ井宝の森林（やま）プロジェクトの役員になるなど、共同作業に対する地域の理解・協力が得やすい環境があった。そこに交付金を活用できたことで、活動に必要な機材や作業の対価を得る事ができるようになり、そのことが活動に継続して参加するインセンティブとなっている。また、こまめに反省会等を開催することで会員間の結束を深めている。

活動内容：資機材を充実することで安全性の確保と資源利用を進める

団体名：桜山（さくらやま）きづきの森

活動タイプ		活動場所：群馬県藤岡市（ぐんまけんふじおかし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
	森林機能強化	
	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

桜山（さくらやま）きづきの森は、平成 13 年に設立した団体で、子供たちが学び遊べる場としての里山づくりを行いながら、人と森と里山との共存関係の実現と継続を目的としている。

地元の山主に山林の整理を依頼されたことが活動の始まりである。

森林の整備に当たっては、森林作業の経験のほとんどない人が多くを占めていたが、そうした人も含める形で、当初は強度の間伐を行うことにより山を生まれ変わらせる鋸谷（おがや）式間伐による管理方法の研修などを実施した。

10 年にわたって鋸谷式間伐による森林管理を継続してきたが、間伐材の搬出・利用についても検討する時期に入ってきた。このため、間伐材の搬出や利用のための資機材導入の検討や、作業中の作業者の安全確保のため、作業中に着用するヘルメット、グローブ、チャップスが一定数必要であるという状況でもあった。

鋸谷式間伐による森林整備（地域環境保全タイプ）

間伐作業の安全確保のために、本交付金でチェーンソーやポータブルウィンチの資機材や、防護服等の安全装備を確保して作業を進めている。

また、難しかった急斜面の間伐については、本交付金を活用して業者委託を行うことにより、対象地を一巡して管理する事が可能となった。

また、鋸谷式間伐の提唱者である鋸谷氏を招いて、その方法について研修を受けた。

▲交付金を利用して装備を充実させる

間伐材の活用を目指した取り組み（森林資源利用タイプ）

鋸谷式間伐が切り捨て間伐であるため、間伐材は基本、林内に残していたが、以前から、間伐材の利用ができないか検討していた。

交付金で、間伐材の搬出のための資機材を購入（ポータブルウィンチ等）することで、平場まで運ぶことが可能となった。

搬出した間伐材は、製材して作業小屋の整備・補修に利用するほか、一部、売却などもしている。

▲ポータブルウィンチで間伐材を搬出

活動状況・成果

資機材を充実させることにより活動が進展

防護服やヘルメット、グローブなどが助成の対象となることから、安全性・機能性に留意したしっかりした装備を購入することができた。

なお、群馬県の森林ボランティア紹介の Web サイトでは、山仕事で必要な道具は会で所有し、初心者でも気軽に参加できる団体として PR している。

また、ポータブルウィンチを購入することにより、これまで切り捨てていた間伐材を資源として活用できるようになった。

▲装備充実で作業の幅が広がる

▲ポータブルウィンチ

特徴的な取り組み

安全性への配慮

安全性には特に配慮し、無理をせず、疲れるまでやらないこととしている。

難しい急斜面での間伐作業は業者委託を行っている。

成功を生んだポイント

元々山仕事を専門としているわけではない人々の集まりであったが、交付金を用いて資機材を充実させることにより、作業内容の充実、安全性の一層の確保ができるようになった。また、これまで切り捨ててきた間伐材も、資源として活用できるようになり、活動の幅が広がっている。森林管理の遅れにより、周辺の山林でも積雪等による道路への倒木などが見られることからも、メンバーをはじめ関係者の間にも、間伐の意義がこれまで以上に浸透してきている。

活動内容：産学公と地元の連携による森林管理と地域活性化の取組み

団体名：あきる野菅生（すがお）の森づくり協議会

活動タイプ		活動場所：東京都（とうきょうと）あきる野（あきる）市（のし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

あきる野市の市有林内には、かつての工業団地造成の際に、残土処分の場となった場所がある。その土地の活用と多様な自然環境の復活・保全を目指して、平成 23 年 7 月に、あきる野市、明星大学、近隣の IT 企業の産学公による「自然環境保全活動等に関する協定書」が締結された。この協定により、森の保全・活用や地域の活性化の調査・研究、森づくり活動の担い手の育成を行うこととなった。

平成 23 年 8 月には、協定の内容を実現するために、菅生町内会や青年会議所、NPO、西多摩マウンテンバイク友の会が加わり、あきる野菅生（すがお）の森づくり協議会が発足した。

現在活動している場所（市有林）は、西多摩マウンテンバイク友の会と IT 企業関係者が管理主体となって活動を進めてきたが、協議会としては管理に必要な道具（ノコギリ、剪定ばさみ等）をこれまで保有しておらず、数が十分ではなかった。さらに、対象地はコナラ中心の落葉広葉樹の林であるが、萌芽更新が行われず、人為的な管理の必要性が指摘されていたことから、平成 26 年から本交付金を活用して森林整備を開始した。

機材を購入することで多様な主体が参加（地域環境保全タイプ）

西多摩マウンテンバイク友の会と IT 企業関係者により、20 名程度の「木こりチーム」が結成され、対象地の中で伐採等が必要な場所を横断的に管理している。また、安全確保のため、チェーンソー利用のための現場研修を実施するとともに、防護具などもそろえた。

本交付金は、管理に必要な消耗品等の購入資金とするとともに、コナラ林の伐採のための人件費として活用している。

▲マウンテンバイク友の会や企業、大学生などが作業に参加

この他、森林資源利用タイプの交付金を用いて、ほだ木整備などのキノコ作り等の活動を行うとともに、教育・研修活動タイプの交付金を用いてシイタケの種駒打ち体験や子どもの自然体験などの取り組みを行っている。取り組みは森づくり協議会のもつブログなどで積極的に宣伝している。

活動状況・成果

交付金の取得による目標の明確化

交付金の交付を受ける以前は、なかなか予定通りに管理作業が進まなかったが、交付金を活用することで、年間に管理する範囲が明確化され、さらに各団体の目標がより鮮明となり、管理作業が一層円滑に進むようになった。

特徴的な取り組み

産学公の協力による効果的な役割分担と人材・人員の確保

産学公の連携を推進していくため、産（IT 企業）、学（明星大学）、公（あきる野市）が、森づくりについて連携協力して進めていくことを目的として協定を結んだ。

それぞれの役割は以下のとおり。

行政：協議体の信頼性確保及び確実な実行、全体のとりまとめや調整、
全体の定例会議（年 2～3 回）の準備

大学：学術的アプローチ、学生による森林管理体験作業（春先に 100 名規模）
環境教育のスタッフ

企業・団体：人的供給

地元 NPO 法人：技術支援及び機動力のある運営

また、地元町内会との協調が事業継続の鍵となっている。

▲産学公による協定を結ぶことで、森づくりのための連携協力が進んでいる

▲大学との協力などで、森林体験活動等のスタッフを確保

成功を生んだポイント

市有林の保全・活用について、あきる野市、近隣の大学、民間企業の産学公が関与する形で「自然環境保全活動等に関する協定書」を締結し、関係主体の継続的なかかわりを維持している。特に活動当初は、事務局運営や各種調整等にあきる野市が主体的に関わってきた。市が事務局として参加することで取り組みが非常に進展した事例である。また、関係主体ごとに管理区域を区分けされており、関係主体間で対象地域の森林管理の方向性について共有し、それぞれ割り当てられた地区の管理について、責任をもって活動を行う体制が構築されている。

活動内容：少人数でもできる都市型里山林整備

団体名：狭山丘陵（さやまきゅうりょう）の森レスキュー隊

活動タイプ		活動場所：埼玉県所沢市（さいたまけんところざわし）
○	地域環境保全（里山林整備）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動を始めた経緯

活動組織の代表の所有する山林が長年放置されず、荒れ放題であった。もともとはヒノキが主体の森であったが、外来種のニセアカシアが入り込み、鬱蒼とした森になるとともに、風倒木等がかかり木となっているものも多く、とても人が入り込めるような場所ではなくなっていた。

もともと雑木林の整備に興味があったこともあり、森に関する別の活動で知り合った仲間とともに本交付金を活用した活動を平成 26 年より始めた。

▲ニセアカシアを処理して、明るい森に

森林整備で伐採した木材を薪として利用（地域環境保全タイプ）

交付金によって揃えた機材を用いて、下草刈りやかかり木の処理を行った。特に、ニセアカシアの 4 分の 1 がかかり木になっており、森林内に入ることが非常に危険な状態となっていた。

処分した木については、幹部分は薪として活用している。薪にすることで伐木の搬出が無料でできるようになった。薪は森林整備の取り組みの際に手伝ってもらった人などに持っていってもらっている。

対象森林が軽トラックの入れる道に隣接していることで、一般人による持ち帰りが可能になっている。

また、薪としての資源量を把握するため、森林内の木はすべて直径を調べている。

狭山丘陵 森のまき市場

薪づくりで、里山の若返り！

1 月 24 日(土)、31 日(土)、2 月 21 日(土)

10:30 集合（14:00 終了）

会場：埼玉県所沢市三ヶ島の森（案内図参照）

●チェーンソーを使った広葉樹の伐採見学があります。
●1束分の薪（玉切り）を1コインで手に入れることができます。
●樹種は火力と火持ちに優れる広葉樹のアカシアです。
●その場で薪割りもできます。
●里山の若返りを学びます。

応募方法等

■申込期限　各開催日の2日前の木曜日まで
■申込方法　自宅住所15名、代表者、FAX または電子メールにより、下記様式に氏名、住所、電話番号を明記してお申し込みください。
■費用　参加費無料。薪の使用は有料（軽量約70cm×高さ約37cm束で1コ200円）
■申込先　狭山丘陵の森レスキュー隊事務局（特定非営利活動法人木の家だいすきの会内）〒359-1116 所沢市東所1-1-1704　TEL 04-2926-6045　FAX 04-2926-5743　メール office@kiwa.org
■持ち物　種子、軍手、汚れても良い運動靴、タオル、弁当、水筒、マスク、ビニール袋等

狭山丘陵の森レスキュー隊　宛（FAX 04-2926-5743）　狭山丘陵・森のまき市場　申込書

平成　年　月　日

（ふりがな）氏名		参加希望日	□1月24日(土) □1月31日(土) □2月21日(土)
連絡先	住所　：〒		
	TEL　：　　FAX　：		
	電子メール　：		

この事業は、平成 26 年度森林・山村多面的機能発揮対策交付金の助成により実施しています

▲薪づくり活動を実施

安全講習によって広がる地域の交流（教育・研修活動タイプ）

一緒に作業を進めるために、安全講習を実施した。安全講習では専門家に講師を依頼。講習を受けただけでは身につかないこともあるので、チェーンソーの扱いについて、実際に伐倒の実技演習も実施した。近隣住民は自前でチェーンソーを持っている人も少なくないため、チェーンソーの講習会を通じて、地域の交流も広がっている。

また、近隣の大学などの専門家と協力して、親子対象の森林の観察会なども実施している。

▲チェーンソーを使った伐採講習

活動状況・成果

少人数でもできる都市近郊林の整備

もともと風倒木がかかり木になっており、入ることに危険がある森であったが、かかり木の除去などで、見通しも良くなり、安全な森となった。森の安全性が増すとともに、子供たちが参加できる取り組みの実施など、できる活動の範囲が広がっていった。

交付金を活用して、特にチェーンソーや刈払機、ヘルメット等の資機材の充実を図った。少人数であっても、道具さえあれば都市近郊の里山整備ができることが明らかになった。

また、森を整備して、開けた明るい森となることで、ゴミの不法投棄が劇的に減った。

特徴的な取り組み

薪ユーザーと協力することで搬出コストがゼロに

伐採した木の搬出が最大の課題であった。だが、薪の入手先を探していた薪ストーブ利用者と協力することにより、薪を持っていってもらえるので、搬出にかかる費用がゼロとなり、ウィンウィンの関係となっている。現在では、薪ストーブの関連団体と共同で森林整備・薪づくり活動を行い、薪を利用してもらっている。所沢市（ところざわし）はインターチェンジとも近く、都心にもっとも近い里山として、薪の供給地として有望であると考えられる。

森林の材積をはかり、薪の供給可能量を調べている。15 年周期で伐採すると、1ha あたり年間 3～4 軒分の供給が可能となる。

▲伐採した木で薪をつくる

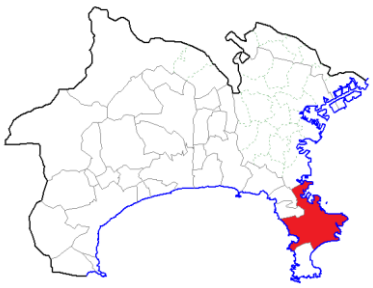
成功を生んだポイント

交付金で資機材を整備することで、少人数でも作業を行うことができる体制を整えることができた。

伐採した木材の搬出が課題であったが、薪ストーブ利用者と協力し、共同で森林整備・薪づくり活動を実施することで、搬出の問題をクリアすることができた。このように、薪の利用者である外部の薪ストーブ関連団体との協力体制によって効果的に課題を解決した事例。

活動内容：若い世代が参加した森林整備による生態系保全

団体名：NPO 法人　三浦半島（みうらはんとう）生物多様性保全

活動タイプ		活動場所：神奈川県横須賀市（かながわけんよこすかし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

NPO 法人三浦半島生物多様性保全は地域固有の生態系保全に寄与することを目的として、平成 24 年に設立された団体である。

活動フィールドの中で竹が繁茂して手が付けられない場所があったことから、その対策を行うことが必要であった。そんな折、近隣で活動する別の活動組織から紹介があり、人件費としての利用が必要というニーズに合致していたこともあり、平成 25 年から本交付金の活動を開始した。

森林整備による生態系保全（地域環境保全タイプ）

活動組織は生態系の調査や生息地保全を専門とする。対象となる山林は、侵入したモウソウチクが繁茂するなど、貴重種にも影響を与えていた。

交付金を用いて竹の伐採を行うことにより、林内の一部を明るくすることができた。今後はこうした場所にコナラなどの実生を順次移植する予定である。

また、かつて薪炭林だった樹林の更新も進めている。

これらの森林整備活動が生物多様性の保全にもつながっている。

加えて、教育・研修活動タイプの交付金を用いて、生きもの観察や森林・環境教育活動を実施し、取り組みに対する理解を広げている。

▲急速に侵入しているモウソウチクを伐採し、明るい落葉広葉樹の林への転換をすすめる

活動状況・成果

交付金を活用した活動が更なる仲間を集める

交付金を活用して参加してもらっている会員以外の参加者も含めた有償ボランティアの方々が、活動をきっかけに、地域の環境問題への関心を高めている。

交付金を活用することにより、新たな仲間が増えている。

特徴的な取り組み

倒木などの有効活用

雑木林の倒木などの材をいかに活用していくかも課題と考え、伐採木を一か所に集めて、重ねておくことで、トウキョウサンショウウオをはじめとした、多様な野生生物の生息場所として活用している。

▲伐採木を積み上げ、野生生物の生息地を創出

若い世代が参加しやすい仕組み

若い世代には、環境に関心のある人が多い。そのため、こうした人々にも参加してもらえるようにフェイスブックやメールマガジンで情報発信している。

また、一般の方にとっては、竹林管理などはそもそもなじみがないことから、本交付金の活動とは別に初心者でも入りやすい田んぼ体験や自然観察などに参加してもらった方々（特に子育て世代のお母さん）に声をかけて、本交付金に関連する竹林管理等の別の保全活動にも参加してもらっている。こうしたお母さんたちの一部が有償ボランティアのメンバーになって、活動を支えている。

▲森林管理の活動にたくさんの若い世代が参加しているが、自然観察会などがきっかけとなっている人も多い

安全の確保

安全管理を特に重要と考えている。チェーンソーや刈払機は、有資格者以外は使用しないように徹底している。

成功を生んだポイント

メーリングリストを使った情報発信や、田んぼ体験など、比較的取り組みやすい活動に参加した人に積極的に声をかけて、竹林整備等の有償ボランティアとしての作業に参加してもらうなど、若い世代が参加しやすく、かつ継続しやすい場づくりをすすめることで、参加者の輪を広げている。こうした活動の広がりが新たな仲間を集める呼び水のようになり、活動が活発化している。

活動内容：地域に密着した竹林整備活動

団体名：NPO 法人　竹林救援隊

活動タイプ		活動場所：岐阜県各務原市
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

各務原市及び近郊における放置竹林の整備を行うために、平成 15 年より NPO 法人化して活動を始めている。住宅地に隣接する外山地区が竹に侵入され、森林景観が見られなくなっていくことについて、地域住民の方々から相談を受けていた。外山地区は地権者の数の多さと整備費用の同意等の諸問題があり、地権者の同意は容易ではなかった。だが、平成 25 年より本交付金を利用することで、費用問題を解決し、地権者の同意が得られた場所について、有効活用できる竹林への整備を目指している。

民有地での竹林整備活動（地域環境保全タイプ）

住宅地に隣接する放置竹林 1.7ha の間伐整理を実施している。人が立ち入れないような鬱蒼とした竹林から、間伐して見通しの良い竹林になるように整備を行っている。間伐を行った竹の枝の部分はチッパー機で処理を行い、竹林に散布して雑草抑えとした。

▲チッパーによる処理

▲作業風景

下刈り、除間伐、倒木、落下枝の処理等（地域環境保全タイプ）

整備して日当たりのよくなった場所では、雑草の繁茂が予想以上に激しかったため、草刈りの回数も増加した。そのため、資機材購入で購入した草刈り機を用いながら下刈りを実施。また、枯れ木、倒木も処理することにより、里山を整備した。

雑木・森林整備安全講習会（教育・研修活動タイプ）

今までの竹林整備活動に加え、森林・山村多面的機能発揮事業において、一部雑木に竹侵入林が含まれるため、改めて雑木整備の基本の学習を行っている。整備機器類の実践活用講習を含め、会員による作業の安全を確立させた。

竹細工体験（教育・研修活動タイプ）

地域の子どもたちなどを対象に、竹の植生・利用方法の解説を行った後の竹細工体験などの取り組みを行っている。こうした取り組みは各務原市の広報誌にも掲載され、認知度が高まっている。

活動状況・成果

まち全体の放置竹林が減少し、新たな市民活動の場が構築される

市民の方々の竹林に対する意識の変化も見られ、竹林救援隊の整備活動以外でも、各務原市市街地及び里山における放置竹林の減少が見られる状態となっている。竹林救援隊にも、各務原市内を中心とした民有竹林の間伐整理依頼が毎年数件寄せられるようになってきている。

行政、各種団体からも竹に関する取り組みへの参加要請が多く寄せられている。

放置竹林の減少と、市民のリタイヤ後の市民活動のフィールドが着実に確保されつつある。

活動に対する会員の出席率は 80%を超えており、会員が高齢者であるにもかかわらず非常に高い。

特徴的な取り組み

安全性の確保

安全の確保のため、交付金取得後は、年 1 回、講師を呼んでの竹林伐採の講習を行っている。

ヘルメットは全員に支給し、チェーンソーの利用は保険加入者のみに限定するなど、安全性に特に配慮をしている。

市との連携による放置竹林対策

各務原市の各窓口に届く市民からの竹林に関する問い合わせは、全て竹林救援隊に連絡されるように協力体制が取られている。

▲安全講習会の様子

成功を生んだポイント

地権者や市など地域からの信頼を得ることで、安定的な活動を実施できるようになっている。

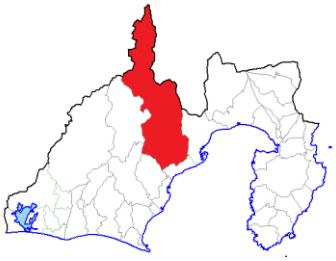
会員の参加率が 80%を超えるほど高いため、効率的な作業を行うことができるようになっている。

竹林の問題に関連して市からの情報提供体制を構築することにより、活動の場を広げている。さらに、竹に関する取り組みを広げるために市への働きかけを行うなど、市内で問題となっている放置竹林問題解決のために積極的な市との協力関係を構築している。

活動内容：多様な主体との連携による竹チップの資源化の実現

団体名：麻機（あさはた）自然体験コミュニティ「Balance」

活動タイプ		活動場所：静岡県静岡市葵区（しずおかけんしずおかしあおいく）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
	教育・研修活動	



活動の内容

活動の経緯

同団体は、平成 24 年に子育て世代の有志約 20 名が集まってできた任意団体である。子供たちの山での自然体験活動の機会の創出や、竹林整備のボランティア活動に取り組んできた。

しかし山仕事は重労働になるため、ボランティアの範囲での声掛けがしにくく活動が広がらなかった。平成 25 年から本交付金を活用することにより、日当、傷害保険、作業委託にも使えるため、活動を広げる絶好の機会となった。

▲交付金により活動の幅が広がる

竹林整備から広がる様々な連携（地域環境保全タイプ）

山仕事の体験機会を創出している。

特に、スギ・ヒノキ林に比べ伐採や搬出を行いやすい竹林管理を中心に実施し、切った竹を用いて竹チップ生産等を進めている。

使い道は、竹林整備等の人件費（作業委託費含む）が 8 割で、残りは燃料費や消耗品費である。

交付金がなくなったのちも活動を継続していけるように、森林整備や竹林整備によって交付金以外の資金を得られるようにすることを目指している。

▲伐採竹はチップ化して資源に

活動状況・成果

竹林整備から広がる様々な主体との連携

竹をきっかけに様々な主体との連携が進み始めた。

竹林管理は、スギ・ヒノキ林などの管理と比べると比較的、労働負荷が少なく、こうした体験を通じて、山林の状況を知り、山林管理に関心をもつ（一定レベルの技能を身に着けた）若者が増えてきた。この交付金により 20 代前半の若者２名が１年間の竹林伐採を経験して、林業事業体に就職するなど、林業従事者として活躍するようになっている。

本交付金の活動ではないが、竹チップ生産では、障がい者就労継続支援事務所に依頼して、伐採した竹の玉切りやトラックへの積み込み、破砕作業を一部委託している。また、地元の遊水地保全活動をしている静岡北特別支援学校高等部と連携して、耕作放棄地を使った炭素循環農法の試行なども行っている。

竹チップは、地元の静岡大学と共同で、竹チップの農業利用に関する実証実験を始めている。

竹チップを発酵させた土壌改良材については、一部、静岡市が買い取り、生ごみと混ぜて家庭用肥料と使えることを解説したシールをはった袋に詰めて、生ごみ処理剤として市内のスーパーで無償配布している。すぐに品切れになるほど好評である。

この他、地域活性化を図る取り組みや子どもたちが参加する活動で竹材を活用している。

▲チップ化した竹を生ごみ処理剤として配布

運んだ竹 チップに

葵区 特別支援学校生ら里山整備

荒廃竹林から採取した竹を運ぶ生徒ら
＝静岡市葵区（写真の一部を加工しています）

静岡市葵区の麻機地区で荒廃竹林の整備などの里山保全活動に当たる自然体験コミュニティー「Balance」はこのほど、同地区で竹の破砕作業に取り組んだ。

メンバーは県立静岡北特別支援学校高等部の生徒や障害者就労継続支援事業所「モリス」のメンバーら20人と、伐採した竹を運んだり機械でチップ化する作業を体験したりした。

チップ化した竹は有機堆肥として地域の遊休農地で行う野菜作りに使う。

▲取組は地元の新聞にも報道される

特徴的な取り組み

安全性の配慮

危険を伴う急傾斜地での竹の伐採・搬出作業については、交付金を用いて地元の林業・造園会社などのプロへ委託するなど、業務委託を効果的に使って、作業効率と安全性の両立を図っている。

安全を確保するために、作業を行う上で何が危険であるかについて、指導を念入りに実施することで、作業従事者の安全に対する理解を深めている。

成功を生んだポイント

県だけでなく、大学や障がい者就労継続支援団体、地元の林業・造園会社、企業といった多様な主体と協力することで、竹林の整備と、竹を使った資源の活用の双方が進み、活動に広がりがでている。

安全性を確保するための指導を念入りに行うことで安全性を確保している。

活動内容：地域の特性を理解した森林管理が生み出す美しい里山景観

団体名：NPO 法人　海上の森の会

活動タイプ		活動場所：愛知県瀬戸市
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
○	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動を始めた経緯

対象地である海上の森は、「愛・地球博」開催予定地とするか森を守るかで大きな議論を巻き起こした場所である。その全体の面積は約 530ha で、そのうち約 510ha が県有林である。

海上の森の会は、愛知万博開会前の平成 16 年 12 月に設立され、万博の会場計画変更によって守られた豊かな里山環境である海上の森の保全と活用に向けて、県と協働しつつ活動を実施している。

安全性に配慮した里山整備（地域環境保全タイプ）

交付金を用いて間伐や下草刈りを実施している。しかし、対象地の土壌は真砂土であり、土砂崩れを起こしやすいという特性がある。単純な間伐や下草刈りでは下層植生が育つ前に土砂崩れが生じる恐れがあった。そのため、間伐材や伐採したモウソウチクを活用して土留めをつくり、土砂崩れを防止している。これらの土留めによって、下層植生が成立するまでの時間を稼ぎ、生物多様性の維持に寄与するとともに、下流部の田畑への被害を防止し、地域の安全性を確保している。

▲間伐材活用の土留め

▲300m の山道整備（森林機能強化タイプ）

安全性を確保するための道づくり（森林機能強化タイプ）

平成 28 年度、平成 29 年度での作業場所のために、安全に移動や搬入・搬出等ができるように、300 mの作業道を整備している。整備された道は安全な作業のために必須のものである。

海上の森の素晴らしさを知ってもらうための観察会の実施（教育・研修活動タイプ）

県内でも類を見ない自然豊かな海上の森の素晴らしさを知ってもらうため、自然を学ぶ会を実施している。新聞にも掲載され、名古屋市始め近隣市町村から参加者が訪れている。

活動状況・成果

美しい里山景観を取り戻す

間伐を行うことで、下層植生が復活した。特に特記すべきこととして、明るい林内に生育するコアジサイの群落が復活したことが挙げられる。その後の下草刈りでは、刈ってよい草木と刈らない草木との区別をつけるようにして整備を行っている。

また、ヤマザクラ、ウワズミザクラなどを残して間伐を行っている。これらの桜は、それまでは間伐されていないヒノキにおされて日照が悪い状態となっており、あまり花を咲かせることはなかったが、間伐を行うことで、素晴らしい花を咲かせるようになっている。

▲出現したコアジサイの群生整備

特徴的な取り組み

参加者間の対話による意識の共有

参加者間の対話を通じて、どのような森を作っていくのかについての意識を共有できるようになった。それにより、下層植生を守るために、刈ってはならない植物を指定するなどの難しい作業を行うことにも同意が得られている。

安全性の確保を最重要視

作業参加者には安全のための座学を必須で実施し、チェーンソーや刈払機は講習受講者以外には使用させないなど、作業及び現場における安全対策を特に重視して活動している。

▲森林内での土留め整備

成功を生んだポイント

対話を通じて、どのような森を作っていくのかについての意識の共有を実現したことで、難しい作業を実現することができるようになった。

土壌なども含めた地域の森林環境の特性を理解することにより、適切な保全や管理を実現している。また、コアジサイ群落の発生などのように、計画当初は想定していなかった出来事についても、森林の状況をきちんと把握することにより、適切に対応している。

平成 18 年施行の「あいち海上の森条例」に基づき、県が海上の森の保全活用計画を策定。海上の森の会は、海上の森の保全と活用のために県と協働して活動を進めている。

活動内容：竹林・里山整備による地域振興の推進

団体名：伊賀（いが）の里山整備・利用を考えるグループ

活動タイプ		活動場所：三重県伊賀市（みえけんいがし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

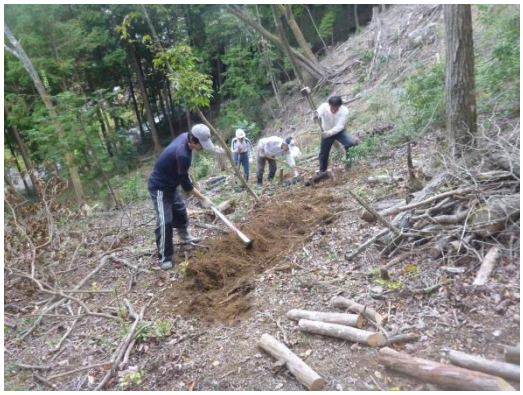
伊賀市（いがし）の旧大山田村（おおやまだむら）・青山町（あおやまちょう）地区においては、以前は林業が盛んであったが、木材価格の低迷、林業就業者の減少と高齢化等社会環境の変化に伴い、台風による風倒木被害地の放置、竹の侵入、間伐遅れの林分の増加等による森林の荒廃・劣化が著しい。

このような状況の中、三重大学社会連携研究センター・伊賀研究拠点では、伊賀市のバイオマスタウン構想を実現させるために、森林・里山整備等についてのテーマで調査・研究を進めていた。

平成 25 年に入り、地域の有志から森林・里山づくりについて、伊賀研究拠点に相談があり、大学と地域住民の協働によって成り立つ新たな組織である同グループを立ち上げ、里山再生に取り組むことになった。

祠までの道を整備（地域環境保全タイプ　里山林保全）

雑草木の刈払い、集積・処理を行い、山桜や紅葉などの植林をしている。このほか、秋葉神社の祠が急斜面の山頂にあるにあるため、階段や散策路の整備をしている。



▲散策路整備の風景

伐採竹を資源として活用
（地域環境保全タイプ　侵入竹除去・竹林整備）

伐採した竹を搬出して燻煙竹、竹炭に加工するなど、竹の利活用方法について組織の構成員が知恵を出し合って考えている。

森林についての正しい理解を広げるための森林体験・学習（教育・研修活動タイプ）

森林の持つ多面的機能を一般市民に PR するとともに、森林の正しい知識を身につけ、これからの森林づくりに活かしていけるように、多種・多様な講師を招いて、森林体験・学習の活動を行っている。

自然観察指導員による植物や昆虫の生態などの話のほか、森や近くの川辺での生き物観察や、竹炭づくりの体験教室なども実施している。

森林体験・学習の取り組みは年間４回、季節にあわせたプログラムを作成している（夏：竹林伐採と竹工作、秋：伐採広葉樹（ほだ木）への菌うち、冬：竹炭づくりなど）。各回親子で 20-30 名程度集まる。

▲親子対象の森林体験･学習の風景

活動状況･成果

子どもたちのための自然体験の場の創出

勝地（かちじ）の里山は雑木の間伐が進み、山頂の祠までの階段づくりや泉の整備を行った。坂下の竹林は間伐が進み、明るい林ができてきた。その結果、地元の子供たちの自然体験の機会や場を創出できた。竹の活用方法については苦労しているが、地元（伊賀市）の竹灯幽玄祭の灯籠など、様々な取り組みにおける工作材料などに活用している。

▲坂下地区の竹林伐採の状況

特徴的な取り組み

大学と地域の連携

三重大学社会連携研究センター・伊賀研究拠点では、伊賀市のバイオマスタウン構想の実現として、森林・里山整備等についてのテーマで調査・研究を進めていた。地域から森林・里山づくりについて、伊賀研究拠点に相談があり、新しく組織を立ち上げて共同で里山再生に取り組んでいる。例えば、生産した竹炭の水質浄化機能などの調査・研究は、伊賀研究拠点で行っている。

成功を生んだポイント

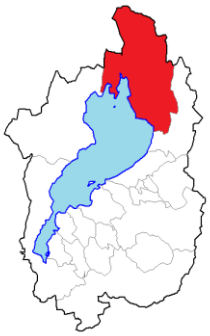
地元の人たちの話に耳を傾け、どういう地域にしたいかという想いをくみ取り、これからの森づくりや森林管理に反映していくことで、地元の方々の活動への理解を得ている。

伐採した竹については、竹炭づくりや竹灯篭づくり、地元の祭りなどへ出展したりもしている。また森林体験学習での竹工作などでも活用している。

大学と地域の連携により、森林から生まれる資源の利活用方策を検討し、里山再生を通じて地域活性化につなげることを目指している。

活動内容：豊かな生態系を次の世代に引き継ぐための森を活用した環境教育

団体名：山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会

活動タイプ		活動場所：滋賀県長浜市
	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

山門水源の森は、かつてゴルフ場予定地として開発の危機にさらされていたが、バブルの崩壊で計画は消滅。平成 8 年には滋賀県が買収、公有化して保安林に指定されている。

薪炭林として昭和 36 年ごろまで活用されてきた森は、その後の社会変化とともに放置され、身近な植物が減少していた。そのため、先人が汗して造りあげた山門水源の森の生態系を取り戻すことを目指して、平成 13 年に「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」が設立された。本交付金は平成 25 年から活用している。

▲山門水源の森の風景

森を守る活動を次世代に引き継ぐための森林教育活動（教育・研修活動タイプ）

森の生態系を「次の世代に引き継ぐ」ことを目標として、地域の小中学校を対象として、森を活用した環境教育活動のために本交付金を活用している。

対象地である山門の森周辺の小中学校では、子どもたちを対象として森を活かした環境教育がカリキュラム化されている。そのため、学年を上がるごとに段階を追って、森での活動に参加し、森での活動についての理解を深めている。

落枝拾いや獣害防止テープの巻付け、樹木の根を守るための作業道への木質チップ撒き作業などの他、木を切るところから炭焼きの一連の過程を体験する取り組みも実施している。

▲子どもたちが参加して
の間伐材の玉切り作業

活動状況・成果

小中学校との協力による将来に向けた人材の育成

近隣の小中学校が、森林・環境教育活動の一環として、森林の保全活動に参加している。東京や岐阜などから修学旅行生の受け入れもおこなっている。

大人数名では時間がかかる作業であっても、子どもたちが何十人、何百人と参加することにより、労力の観点から非常に有効な成果をもたらしている。落枝拾いや獣害防止テープなど、子どもたちが参加する作業が、希少な林床植物の保護など、この地域の森の生物多様性保護につながっている。

小中学校生徒の対象森林に対する理解が深まっている。活動に参加する子どもたちの目が非常に生き生きとするようになった。

すでに何百人と、森についての活動を経験した子供たちを送り出している。いつか、そのうち何人かが戻ってくれば、森を守る活動が次世代に引き継がれていくことが期待できる。

▲樹木に悪影響を及ぼさないように、道に露出した樹根を保護する木質チップ敷設作業

▲森林を守るため、獣害防止テープの巻き付けを行っている

特徴的な取り組み

経験豊富なスタッフを活用した安全性の確保

子どもたちが参加することから、何よりも安全対策が重要であった。多くの子どもたちが参加する中で、安全に活動を行うようにするためには、相応の数のスタッフが必要であった。

教育・研修活動タイプでは指導のための資格が必要となっているが、資格と経験の双方を有するスタッフは多くない。そのため、資格を持つスタッフに加えて、経験豊富なスタッフが補助員として参加することで、子どもたちの活動の安全性を確保している。

成功を生んだポイント

地域の小中学校と協力して、森における環境教育活動をカリキュラム化することにより、森を守るための活動を活性化させるとともに、次世代を担う子どもたちの森についての理解を深めている。

子どもたちが参加し続けるためには、安全性の確保が最も重要である。地域の子どもたちが安全に作業できるように、経験豊富なスタッフが参加して安全性の確保に特に配慮することで、継続的に子どもたちが参加できる体制が形づくられている。

活動対象地は県有林であり、県の委託を受ける形で整備を行っている。また、滋賀県、長浜市、地元の生産森林組合と本活動組織の４者で、山門水源の森の保全の施策や課題の検討など、定期的な話し合いを行っている。

活動内容：市と地元住民協力のもと、森林整備・地域活性化を推進

団体名：京丹後木の駅実行委員会

活動タイプ		活動場所：京都府京丹後市
○	地域環境保全（里山林保全）	
	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

京丹後木の駅プロジェクトは、林地残材や間伐材を有効に活用して森林整備を進めるとともに、木材の出荷者にはその対価として地域通貨である“モリ券”を発行し、京丹後市内の登録店舗で利用してもらうことで、地域の商店街の活性化を目指す取り組みである。

平成 24 年 7 月に設立された実行委員会には京丹後市の他、森林組合や NPO などが参加している。

実行委員会の一員である市から本交付金のことを知り、木の駅の取り組みへの参加を増やし、既に出荷登録されている方々の整備意欲の増進につなげることを目指して、平成 25 年から活用している。

森林整備が地域を活性化させる（地域環境保全タイプ）

交付金は、森林整備や木材を出荷するための日当として活用している。これにより、これまで山林を管理していなかった土地所有者の一部も、山に入るようになり、市内の山林の管理が進展した。

木材の出荷者には、地域通貨を発行している。地域通貨が地元の商店街（地域通貨登録店舗は 102 店舗）で使われることで、地域経済の活性化につながっている。

▲「みんなで作業(志材搬出)」の風景

▲利用される地域通貨

森林整備のための講習会の実施（教育・研修活動タイプ）

森林整備作業を行うために最低限必要な知識と技能の習得を目的にチェーンソー講習会を開催し、実際の伐採作業や伐採木の選定方法等を基礎から学ぶ機会を設けている。

活動状況・成果

商店の数とその状況

地域通貨を利用することのできる木の駅登録店舗数は102店舗となっている。登録店舗は、地域の個人商店などの小売り店舗で、半分が食料品系である。そのほか、ガソリンスタンド、薬局、機械、工具金物屋、釣具店など、幅広い範囲をカバーしている。

▲木の駅登録店舗にのぼり設置

木の駅プロジェクトによる木材出荷量

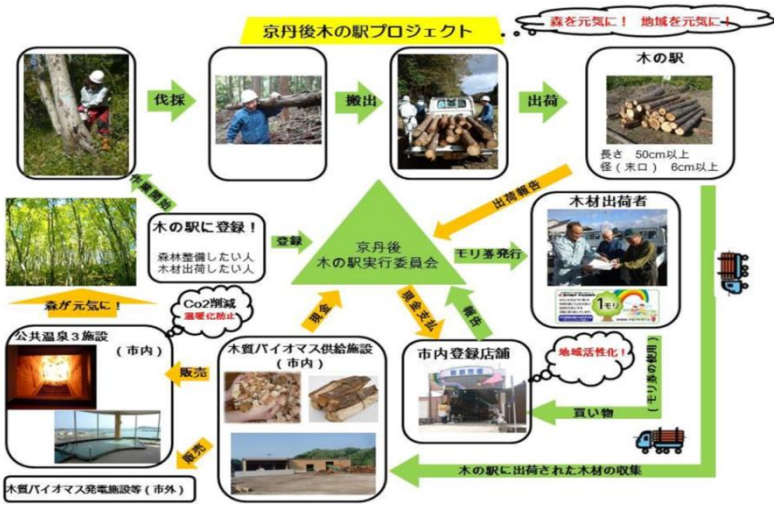
年度	出荷量	備考
平成24年度	84t	木材受入期間1ヶ月の試行段階
平成25年度	159t	木材受入期間4ヶ月間
平成26年度	237t(77t)	木材を通年受入
平成27年度	189t(73t)	平成27年12月末現在

※カッコ内は本交付金を用いることで実現した出荷量

特徴的な取り組み

森林整備と木材利用の資源利用の流れの構築

市内の公共温泉施設などを搬出される木材の利用先として確保することにより、資源利用の流れを構築することに成功している。現在、交付金の多くは森林整備等の日当として用いているが、搬出した木材の引き取り手を確保することにより、本交付金終了後も活動が継続できるようにする体制が形作られつつある。



成功を生んだポイント

交付金を日当として活用することで、木の駅プロジェクトへの参加者を増やすことに成功した。さらに、木材の消費先を確保して、資源利用の流れを構築することに成功している。また、地元の商店街が参加する地域通貨の仕組みによって、森林整備と地域振興の好循環が実現している。

京丹後市は京丹後度木の駅実行委員会の事務局を務めており、間接的に交付金の活動に関わっている。事務局で年２～３回木の駅通信を発行し、全戸配布することで、活動内容の普及啓発を図っている。

活動内容：地域と外部の協力関係によって実現した良好な森林整備

団体名：河和（こうわ）の森（もり）　保全の会

活動タイプ		活動場所：和歌山県橋本市（わかやまけんはしもとし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

もともとは大阪でシイタケつくりなどをする団体であり、林業そのものについては特に取り組みを行っていたわけではなかった。だが、団体関係者の知人が和歌山県で土地を取得。その土地は30年間放置されていた森林であり、うっそうとした暗い森で、人が入り込むことができないような状態となっていた。そのため、平成26年から本交付金を活用して里山林整備を行うことにしたところ、地元からも熱烈な応援を受けることになった。

装備品の充実による安全確保（地域環境保全タイプ）

里山林保全では、下草刈り、枝打ち、間伐を実施。竹林除去でも間伐を行っている。

当初は、ササが大量に繁茂し、木を切ろうとしても、ツルが巻きついていてどうしようもないような状態だったが、下草刈りや間伐などで、林内に光が入り、林の中が見通せるような状態にまでなった。

交付金の利用については、安全な作業ができるようにチェーンソーや刈払機等の装備品を整えることに重点を置いている。

▲安全な作業のために装備品をそろえる

拠点となる休憩場所は自作

作業の拠点となる休憩場所は、伐採した竹や木材を利用して自作している。

▲伐採した竹などで自作した休憩場所

活動状況・成果

地域景観の改善と下層植生の復活

かつての対象地の森林は、鬱蒼としていてあまり近寄りたがりたくないと感じる雰囲気であったが、森が整備されることで、近隣の景観も向上し、森の沿道を歩くのが地元の人たちにとっても楽しみとなっているという。

明るい森林に生育するササユリなどの下層植生が復活している。

▲森林整備によって復活したササユリ

特徴的な取り組み

地域との良好な関係が生み出す活発な活動

和歌山県が対象となる活動場所であるが、活動組織はもともと大阪府内の団体である。

そのため、地域協議会からのアドバイスもあり、地元住民との交流に力を入れている。地元の川の清掃やお祭りにも参加している。

該当の地域は、棚田の保全などの取り組みが行われている場所であるが、そうした地域の棚田保全の取り組みと連携し、ともに作業を行いながら、地域全体の環境改善に寄与している。

たとえば、棚田のうち、放置されて森林化していた箇所についても、本交付金の対象外ではあったが整備を行っている。

このように地元住民と密接な関係を築いたこともあり、地元からの評価は非常に高い。

▲活動組織のメンバーが地元の清掃活動にも参加

▲地元住民と外部からの参加者が密接な協力のもと作業を行っている。

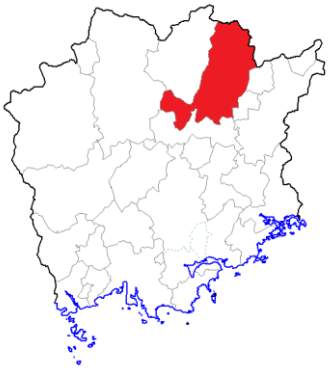
成功を生んだポイント

地元の清掃活動やお祭りに参加するなど、地元住民と密接な協力関係を築くことにより、地元住民からも支持を受けて効果的な活動を行うことができている。

地元の人間と外部の人間がともに森に関する作業を行うことで、交流が生まれ、コミュニティの活性化につながっている。

活動内容： 古代の歴史を体験できる里山

団体名：NPO 法人 倭文（しとり）の郷

活動タイプ		活動場所：岡山県津山市（おかやまけんつやまし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

昭和 50 年代に久米地区（くめちく）にゴルフ場が開発された際に、ゴルフ場周辺の山林を開発企業が買い取り、体験型宿泊施設が整備された。一帯には、国内でも最古級の製鉄跡地や 120 基に及ぶ古墳などの史跡が点在していたが、ゴルフ場周辺の山林はその後 50 年近く放置されたため、低木やつる植物が密生するなど荒廃が進み、史跡へのアクセスも困難な状態にあった。こうしたことから、平成 26 年に市の体験型活動施設の指定管理者となった NPO 法人倭文の郷では、そこを活動拠点に、本交付金を利用して密生した樹木の伐採や下草刈り払い等の作業に取り組んでいる。そのほかに、歴史・文化資源を活かした農体験や環境学習などの幅広いプログラムを企画・実施している。

薪炭林として利用されていた頃の里山景観を再生（地域環境保全タイプ）

放置されて密生状態にあった樹木や竹を伐採して、かつて薪炭林として利用されていた頃の明るい里山景観の再生に取り組んでいる。

里山の恵みを五感で味わう（森林資源利用タイプ）

伐採木を活用してシイタケの原木栽培している。また、林内に自生するキノコ類や山菜などの里山の恵みを活かして山菜採りツアー（春季）や、キノコ鑑定会（秋季）などの食をテーマとした取り組みを実施している。

▲檜皮葺の技術を構成に継承するため、ヒノキ林の保全にも取り組む

豊かな自然と歴史を活かした体験プログラムの実施（教育・研修活動タイプ）

再生した里山を活かして、月 1～2 回のペースで様々な体験型の取り組みを実施している。様々な年齢･層の団体の受け入れを行っていることを聞いた他地域の団体等が継続して利用するケースなど、岡山県外からの参加者も増加傾向にある。津山市の交流事業の一環で、東日本大震災の被害を受けた福島県内の子ども達を受け入れ、里山体験を行うなどの取り組みも行っている。

活動状況･成果

照度 50%の明るい里山の再生

久米地区の約 10ha の森林の再生に取り組んでいる。作業に携わる中核メンバーは 15 名前後おり、そのほとんどが 60 代以上。

これまでに延長約 3km の歩道を整備し、歩道周囲の樹木や竹林の伐採や下草刈り等を行った。活動範囲内には古代の製鉄施設跡や古墳などが点在しており、今後は、これらの史跡を活かした体験プログラムの展開も期待されている。

▲密生した竹林の伐採

里山の再生と一体的に行う多様な活動

地元の小学生等を対象にした自然体験や環境学習などを実施。また、倭文地域（しとりちいき）にある築 160 年の古民家を活かした田舎体験のほか、農作業体験、スケッチ教室、古代の織物づくり、火起こし体験、土器づくりなど、参加者の年齢層やニーズに応じた幅広い体験プログラムを実施している。

▲現場での安全講習も定期的に実施

▲子ども対象の昆虫観察会

特徴的な取り組み

年間を通じて多様な里山体験プログラムを提供

古代の史跡を多く抱え、伝統的な農的景観を有する久米地区の特徴を活かして、自然観察や農林業体験、食育など、多岐にわたる分野・視点から幅広い年齢層やニーズに応じた体験型プログラムを企画・実施している。

成功を生んだポイント

本交付金の採択を受ける以前から、久米地区の自然環境や歴史・文化を活かした各種プログラムの企画・運営の経験があり、里山をテーマにした体験型プログラムの受け入れ体制を有していた。また、津山市の体験型宿泊施設の管理者として、当該体験型宿泊施設を拠点にして、資機材の保管場所や様々な森林体験プログラムの提供や団体利用の受け入れ対応が可能な環境にあった。

活動内容： 里山の再生を通じて地域の魅力を向上

団体名：美鈴恵みの森づくり

活動タイプ		活動場所：広島県広島市
	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
○	森林資源利用	
○	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

活動の経緯

広島市佐伯区の美鈴が丘団地（約 3,300 世帯が居住）の三方を取り囲むように連なる丘陵は、かつては薪炭やマツタケなどを得る里山として日常的に利用されていたが、昭和 40 年代後半に団地造成が始まった頃から放置され荒廃が進んでいた。こうしたなか、美鈴が丘団地の住民有志が中心となって平成 20 年に「美鈴恵みの森づくり」を発足させ、身近な森林に触れ親しみ、自然の恵みを実感できる場づくりに精力的に取り組む。本交付金を活用した活動は平成 25 年度から実施している。

竹林管理を継続して実施（地域環境保全タイプ）

竹林の拡大を抑制するために、密生した竹や伐採跡地の若竹の伐採を 5 か所（計約 3ha）で継続して実施。伐採跡地では植樹のほか、親子等を対象とした筍掘りなどを開催。

遊歩道と作業道を一体的に整備（森林機能強化タイプ）

来年整備する予定の森林に通じる作業道の整備を平成 27 年に実施した。活動地の丘陵の稜線上からは町内や遠くは瀬戸内海、海に浮かぶ宮島「寝観音」を眺望できる地点が含まれることから、遊歩道のコースとしても利用予定。

▲作業道と遊歩道を一体的に整備

森の恵みを実感できる体験型の活動等の開催（森林資源利用タイプ、教育研修タイプ）

伐採した材の一部は木炭や椎茸の原木として活用している。また、子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした体験型の森林学習会を年間通じて企画・開催し、身近な里山の大切さや豊かさに共感できる仲間づくりに取り組んでいる。

活動状況・成果

道づくりを通じて身近な里山に触れ親しむ環境づくり

傾斜地や稜線などの地形を活かして、これまでに延長約 2.5km の遊歩道と作業道が整備されている。遊歩道沿いには街並みを一望できる場所が所々に設けられているほか、作業の過程で再発見されたミツバツツジやホオなどの樹木が遊歩道の魅力を高める資源となっている。作業道の整備に際しては、遊歩道としての利用も考慮したコース設定を行っている。子どもや女性、高齢者の利用も考慮して起伏の少ないコースが設定されたことで、地域住民が散策等で日常的に森を利用する機会が増えている。

▲遊歩道沿いには、市内の街並みだけでなく、遠く瀬戸内海や厳島神社も一望できる眺望ポイントを整備

里山の恵みを実感し、里山を愛する仲間を増やす取組

里山の恵みを活かした筍掘り、炭焼き、椎茸の駒打ち、自然観察などの体験型の森林学習会を概ね月 1 回のペースで開催。この他に平成 27 年度は、身近な里山に対する興味・関心を喚起するため、交付金の活動とは別に、伐採竹を使ったそうめん流し、縄文式火起こし体験、ホオの花鑑賞会、”のろし”リレー、夜の被爆ピアノコンサート等の活動を 10 回開催し、平均して 20 名以上、最大で 230 名の参加があるなど、身近な里山の魅力や価値を地域で共有するための活動の開催を通じて里山のファンや里山の保全活動の担い手の確保を目指している。

▲自治体との連携で開催した“のろし”リレー

安全管理の徹底

チェーンソー、刈払機、バックホウ等の動力機械を初めて使うスタッフには、事前講習を実施しているほか、傷害保険の加入を行っている。また、作業前には機器の安全点検や、稼働場所の状況確認を行うなど、安全確保には細心の注意が払われている。

特徴的な取り組み

楽しみながら地域の魅力を高める取組

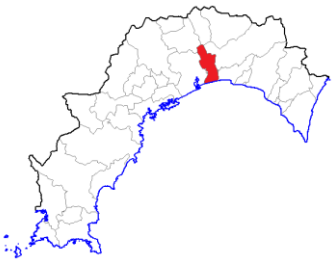
竹林伐採や作業道整備などの作業や、再生した里山を活用した体験型プログラムは、「美鈴が丘団地や周辺地域の住民が身近な里山に触れ親しみ、交流する場をつくる」という共通目標のもとで実施されている。また、各作業や活動は、どうすれば参加者が「楽しく作業・体験しながら、里山の魅力や価値に共感できるか」という点を意識して運営されており、そのことが個々の作業や活動そのものの魅力の向上にもつながっていると考えられる。

成功を生んだポイント

竹林の伐採や作業道の整備などの里山の基盤づくりと併行して、里山の恵みを活かした多様な体験型プログラムの企画・実施を通じて、子どもから高齢者に到るまで幅広い層の地域住民の興味・関心を喚起し、里山の魅力や価値に共感する仲間を増やす工夫がされている。

活動内容：放置竹林解消の広がりが生み出す地域の活性化

団体名：白木谷（しろきたに）ゆめクラブ

活動タイプ		活動場所：高知県南国市（こうちけんなんこくし）
	地域環境保全（里山林整備）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
	教育・研修活動	

活動の内容

交付金を取得しようとした経緯

竹林整備を行い、地域の活性化と良質なタケノコを作ることができる環境を拡げたいと考え、平成23年に同クラブを立ち上げた。放置竹林を借り受け、整備をはじめたものの、竹林整備作業を行うための燃料費や人件費を確保できなければ活動を広げていくことは難しい、活動は2年目にして継続の危機となった。その折に、ゆめクラブ立ち上げをはじめ協力体制にある南国市農林水産課から平成25年に連絡があり、迷わず本交付金を申請した。最初の申請の際には市の助言を得ながら申請を行った。

竹林整備による地域特産品としてのタケノコづくり

タケノコづくりを行う環境づくりを目的とした竹林整備を行っている。モウソウチクの他に、地域特産の秋に生えるタケノコ、四方竹を栽培している。枯竹、古竹の間伐を行うことで、竹林に日の光が入るようになり、良質なタケノコができやすい環境づくりが実現している。

この他、竹粉砕機械（チッパー）などを活用して、伐採した竹を竹チップや竹パウダーなどに加工し、土壌改良材として販売も行うなど、タケノコ以外の竹資源も活用している。

▲日の光が入るようになった竹林

▲竹粉砕機なども活用されている

活動状況・成果

タケノコ販売で放置竹林がお金を生み出す

生産したタケノコは、乾燥タケノコに加工して、地域の道の駅等で販売している。

また、乾燥タケノコについて、飲食チェーン店と契約を結び、その店舗で利用してもらえるようになった。

多くの店舗で、長期間提供したいという要望に対して資源の安定供給および資源量の確保が課題となっている。

このようなタケノコ資源の活用によって、地域の雇用が生まれるという好循環が今後期待できる。

▲干しタケノコづくりは地域で行う

実際の活動現場をモデルとして広がる活動の輪

実際に竹林整備が行われた現場を見ることで、これまで放置竹林となっていた土地を持つ土地所有者からも、竹林整備の依頼が来るようになっている。

交付金を得て人件費を使えるようになったことで、参加者が増えている。参加者が増えることで、作業ができる面積も増えるという好循環が生じている。

▲竹林整備で仲間の輪が広がる

特徴的な取り組み

安全性を確保する作業道の整備

竹林内の作業道を整備することで、搬出等の作業の安全性が増すとともに、作業に参加しやすくなった。参加者確保や作業の能率性の確保の上でも作業道が役立っている。

ヘルメット着用の上で、笛も装備して作業を行っているが、実際に活動を行う場合、チッパーなどを動かしていると、機械の音のために、笛の音が聞こえないという問題が生じることがある。以前、伐採した竹が下の作業者に当たり軽傷者が出たこともあり、上で作業をしている際には、その下で作業を行わないように注意している。上で作業している者は下を確認し、下で作業している者は上を確認する二重のチェックを徹底している。

県との協力が生み出した新たな販路

地域の活動をよく知る高知県が、過疎化対策などの公益に寄与する商品を求める企業との仲介を行うことで、同クラブと飲食チェーン店との契約が実現した。

成功を生んだポイント

県との協力により、企業とのマッチングが実現し、本活動による産品であるタケノコの販売先が確保されることになった。

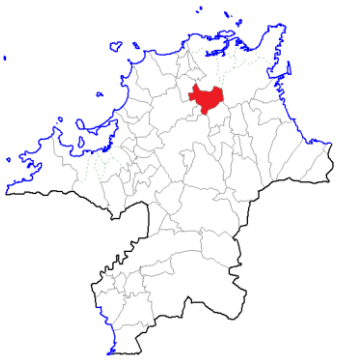
本交付金を活用して人件費を確保することにより、作業に参加する参加者が増え、作業できる面積が広がっている。さらに、実際に整備された竹林を見て、それまで無関心だった土地所有者も整備を希望するようになるなど、交付金が出発点となって竹林整備の輪が広がる好循環が実現している。

日頃より市との関係が深く、いち早く交付金の情報を入手し、最初の申請に当たっては助言を受けるなど、情報面などでの協力関係があることが成功のカギとなっている。

活動内容：50 年前の里山を再生

団体名：金剛山（こんごうさん）もととり保全協議会

活動タイプ		活動場所：福岡県直方市（ふくおかけんのおがたし）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
	教育・研修活動	



活動の内容

活動の経緯

直方市（のおがたし）の北東端に位置する金剛山（こんごうさん）の山麓はかつて山林開拓が行われ、柿やみかん等が生産されていた。バブル期にはゴルフ場開発が計画されたが頓挫し、その跡地に市の産業団地が整備されたものの、周辺の山林は 50 年近く放置され荒廃が進んでいた。こうしたなか、平成 17 年に市が策定した環境保全行動計画で金剛山山麓が里山保全の重点地域となったことを契機に保全の機運が高まった。平成 22 年には、市内の関係 12 団体等で構成する「金剛山もととり保全協議会」が設立され、12ha の市有林を対象に保全活動が行われており、平成 25 年から本交付金を活用している。約 250 名いる会員の多くは定年退職者や婦人会員で構成されている。

50 年前の里山の自然・景観の再生（地域環境保全タイプ）

活動目標は「放置される以前の里山の再生」。地域に本来ある植生の回復が重要であるため、活動地周辺の樹木を種子から育成する等の取組も実施。当初は全域にわたって木竹やつる植物が繁茂して人の立ち入りも困難な状態だった。週 2 回、年間のべ 80 回超に及ぶ作業を通じて、作業道の設置や、樹木や竹等の伐採等を行い、明るい里山景観の再生を進めている。発生する間伐材や竹材はチッパーを用いて破砕処理するほか、木炭やチップとして販売するなど有効活用に取り組んでいる。

▲チッパー導入によりモウソウチクの処理効率が格段に向上

活動状況・成果

里山再生の過程で地域の文化資源を再発見

平成 25 年度より本交付金の支援を受けて集中的に間伐・伐採作業を行ったことで、タブやスギ等の常緑樹や竹が密生する状態は徐々に解消されている。また、平成 26 年度の交付金で購入したチッ

パーの導入後は伐採木竹の現場内処理が可能となり、少人数で効率良い作業が可能となった。

林床に陽の光が差し込む明るい里山景観が回復する過程で、50 年前の開拓時代に造成された石積みの段々畑やクリ林等が再発見された。明るくなった林床ではラン科の希少な山野草も確認されるなど、様々な地域資源の再発見があった。間伐した木材は木炭やチップに加工して販売しているほか、間伐したモウソウチクを竹炭に加工して、遠賀川の水質浄化に取り組む NPO に寄贈する等の活動も行っている。

森を地域共有の財産として継承する取組

作業の過程で再発見された石積みの段々畑や希少種の山野草などの地域資源を活かして、自然観察会やエコツアーなどのプログラムづくりを近隣の学校や地域住民等との連携で企画・実施している。また、森へのアプローチ部に、挿し木により約 2,500 本のアジサイを育成している。平成 27 年度は開花時期にあわせて一般公開を行ったところ、複数の新聞に掲載されたほか、1 ヶ月間で約 1 万人の来場者があった。特に市外からの来訪者に向けた里山保全活動の PR に繋がった。

▲50 年前の石垣づくりの段々畑が再び姿を現した。

安全管理の徹底

チェーンソーや刈払機の作業参加者は、事前に安全講習に参加し、保険をかけたメンバーに限定している。作業開始前には安全確認のミーティングを行い、安全作業の徹底を図っている。チェーンソーや刈払機等の機材使用時には、下肢を保護するスネ当てや、滑落防止用のスパイク付き安全靴を装着するほか、作業時には安全を確認する監視者を置いている。危険な作業があった場合には、事後にその状況・原因、必要な安全対策を検証するなど会員間で安全管理の意識の共有を図っている。

▲里山散策ウォーキング風景

特徴的な取り組み

年間 80 回に及ぶきめ細かな作業

現在、週 2 回実施している作業には概ね 15 名前後の会員が参加している。気温が高い 7～9 月については週 1 回にペースを落として作業を実施。年間のべ 80 回超に及ぶ地道な作業により、対象森林 12ha のうち年間 7～8ha の維持管理が可能となっている。

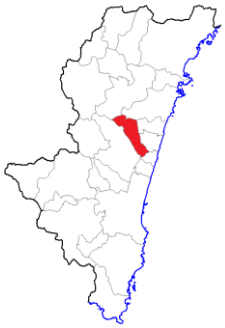
成功を生んだポイント

交付金を利用してチッパー等の機材を導入したことで、少人数でも効率的に作業を進められるようになった。また、作業で使うノコギリやチェーンソー等の機材類をこまめにメンテナンスする会員がおり、常にベストの状態で機材類が使える状態を維持していることも作業効率の向上に繋がっている。

敷地内には作業メンバーの活動拠点（廃材等を利用して自費で作成した作業小屋）があり、作業の進捗状況や申し送り事項、ヒヤリハット情報の共有や安全確認を行う場となっている。作業に参加する 15 名前後の会員はチームワークが良く、個々人の得手・不得手な分野や、プライバシーに配慮した個々人の健康状態などが相互に共有できていることもあり、作業分担がスムースに行うことができている。

活動内容：地域活性化をもたらす森林整備と攻めの鳥獣被害防止対策

団体名：駄留（だとめ）地区鳥獣被害対策協議会

活動タイプ		活動場所：宮崎県（みやざきけん）木城町（きじょうちょう）
○	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
○	教育・研修活動	

活動の内容

交付金を取得しようとした経緯

国有林をはじめとする近隣の森林が整備されず、サル、シカ、イノシシによる鳥獣害被害が深刻化していた。このため、駄留地区（だとめちく）鳥獣被害対策協議会では、平成23年度より、鳥獣被害対策を本格的に実施するようになり、県のモデル事業となった。その縁で、県の担当者からの紹介により、平成26年より本交付金を活用することになった。

鳥獣害被害防止のための森林・竹林整備 （地域環境保全タイプ）

活動内容は、鳥獣害被害防止のための緩衝地帯の整備である。里山林整備タイプでは林道を作り、山を活用するための除伐や枝打ちを実施している。また、下草刈りなど地域の里山景観を作っていくための作業を行っている。また、竹林整備では、間引きや古い竹の整理、玉切りなどを実施している。切った竹は、竹灯籠を作るなど、地域の活動の際に活用している。

▲森林整備が鳥獣害防止につながる

▲切った竹灯籠など地域の活動で活用

活動状況・成果

▲捕獲されたシカ

国有林も含めた広範囲の森林整備

近隣に国有林があるが、これまであまり人が入っておらず、ほとんど整備がなされていなかった。だが、交付金を取得することで、活動の範囲が面的に広がった。もともとは民有林のみを対象としており、国有林（保安林）はほとんど手を入れていなかったが、県の仲介により、国有林（13.4ha）も契約を結んで整備の対象とするようになった。

この結果、あまり人のはいることのなかった森が、人が入ることができる森になりつつある。

森林整備を進めることで実現した「攻めの」鳥獣害対策

かつての獣害対策では、林縁部のみの整備であった。また、来た動物を追い払うだけの守りの対策しかできなかった。しかし、交付金により、森林を整備し、森全体を含めた広い範囲での取り組みを行うことができるようになったことで、鳥獣被害防止対策が大きく進展することになった。

特徴的な取り組み

薪ストーブによって活性化した地域コミュニティ

交付金を用いて、薪ストーブを購入し、活動拠点に設置した。これにより、活動拠点が集落の集会所として機能している。活動拠点において、高齢者や婦人会など、集落から人が集まり、それぞれができることを話し合うことで、活動の範囲が広がるとともに、地域のコミュニティの活性化が実現している。集落の回覧板等で参加を募っているが、参加を募らずとも参加を希望する声が寄せられるほどであるという。

▲購入した薪ストーブが人を集め、様々なアイディアが生み出されていく

日当によって広がる活動、深まる関係

交付金を使って人件費を出すことにより、参加者を広げることにも寄与している。 また、日当の関係があるおかげで、お互いに遠慮なくものを言いあえる関係ができあがっており、それが交流を進めるうえでも大きく寄与している。

成功を生んだポイント

本交付金を用いて購入した薪ストーブにより、地域住民間の交流が活発化し、森林整備活動への地域住民の参加が広がっている。その際、高齢者や婦人会など、様々な立場の人が参加することにより、様々なアイディアが生まれ、活発な活動を行うことができるようになっている。

県との協力で、地元の森林管理署とふれあいの森の協定を結び、国有林も整備対象に加えることができるようになった。これにより、整備できる森林の範囲が広がり、鳥獣害被害対策も大きく進展-することとなった。

活動内容：地域の観光地や農村風景と調和した竹林整備で地域を元気にする

団体名：知覧町（ちらんちょう）たけのこ振興会

活動タイプ		活動場所：鹿児島県南九州市（かごしまけんみなみきゅうしゅうし）
	地域環境保全（里山林保全）	
○	地域環境保全（侵入竹・竹林整備）	
	森林資源利用	
	森林機能強化	
	教育・研修活動	

活動の内容

申請の経緯

南九州市知覧町（みなみきゅうしゅうしちらんちょう）は「薩摩の小京都」と呼ばれ、江戸時代の町並みが残る知覧武家屋敷郡（国指定歴史的建造物）など恵まれた自然や歴史を背景にした観光施設があり、多くの観光客が訪れている。

しかし、幹線道路の沿線や農村公園の周辺には、侵入竹が繁茂し、景観を損ねている箇所が見受けられた。そのため、景観や生活環境の保全および竹林資源の活用等を目的に知覧町たけのこ振興会は平成 19 年より県の補助事業を導入し竹林整備を行ってきた。市は事務の支援で参加している。

しかし、竹林の成長は早く、整備から数年が経過している竹林において、立ち枯れや新たに成長した竹の再整備が必要となった。だが、県の補助金では、すでに整備した竹林を対象とすることができない。そのため、平成 26 年から本交付金を活用して、竹林整備を行うことを目指した。

地域景観と調和することを目指した竹林整備と竹の利用（地域環境保全タイプ）

本交付金を活用することで、過去に整備したことがあるものの、再び荒れてしまった竹林を整備している。

地域を代表する観光地である知覧武家屋敷群周辺の竹林などのような観光客の目に触れやすい場所や、地域住民の憩いの場となっている農村公園周辺などの場所を対象に整備を行っている。いずれは武家屋敷群と合わせて観光資源とできるように、散歩できる竹林を目指している。

▲将来的には散歩できる竹林を目指して整備

活動状況・成果

観光地の価値を高める美しい景観づくり

整備された竹林は、武家屋敷や農村風景と見事に調和し、美しい景観を望むことができるようになり、観光客や周辺の方々から大変に喜ばれている。

周辺の観光資源である武家屋敷や農村風景と調和する竹林整備を行うことで、竹林整備の対象地における観光地としての価値を高めている。景観を守るだけではなく、いずれは竹林も含めて観光コース化することを目指している。

また、整備後は、おいしいタケノコが多くとれるようにもなり、竹林所有者からも喜ばれている。

▲武家屋敷を竹灯籠で飾る

資源としての竹の利用

竹を様々に活用して地域活性化に役立てている。

刈った竹で竹灯篭をつくり、それを武家屋敷群で飾るイベントに利用する取り組みを行っている。

また、刈った竹の一部は、障がい者福祉団体等に提供された後、竹ぼうきにして販売されている。

この他、チッパーによって作った竹チップは近隣の農家に肥料として利用されているほか、刈った竹の一部はバイオマス発電所の燃料としても活用されている。

▲地域住民等により竹ぼうきも作られている

特徴的な取り組み

参加者を増やすための配慮

いつも参加しているメンバーは 4 人ほどだが、一般の社会人の参加も得られるように、平日だけでなく土曜日も活動日として設定している。さらに、参加者の募集にあたっては、地域の 60 歳以上の集まりにおいて声をかけるなど、取り組みを拡げるための配慮を行っている。

また、遠方にいる地主に配慮して、活動を行う前と後に、活動を実施する旨と活動が終わった旨を伝える郵便を出している。

▲市の職員などの支援を受けながら取組を行っている

市との協力関係

基本的な書類作成は活動組織で行っているが、市の職員が事務面での助言など支援を行っている。

また、市に寄せられた竹林整備に関する要望については、知覧町たけのこ振興会に情報提供が行われ、本交付金や県の事業など、利用可能な資金を活用しつつ、市内の竹林整備が進められている。

成功を生んだポイント

観光地である武家屋敷群周辺での作業であり、武家屋敷や農村風景と見事に調和した美しい景観づくりを目指すことで、地域の観光地としての好感度を高めることに寄与している。

市が事務面での助言を行うことにより、円滑な交付金の申請等が可能となっている。また、竹林整備の要望について、市と情報共有を行うことで活動の広がりにつなげている。

平成 27 年度活動事例集にご協力いただいた活動組織の皆様の関連 web サイト

本事例集に掲載されている活動組織の取り組みについて、より詳しく知りたい方は、以下の Web サイトをご覧ください。

一部、ホームページのない活動組織もございます。ご了承ください。

No	団体名	Web サイトの URL アドレス
1	紫波地区里山林保全活動実践協力会	
2	権現森自然研究会	http://members2.jcom.home.ne.jp/7929exho/
3	二ツ井宝の森林（やま）プロジェクト	
4	桜山きづきの森	http://www.kiduki-no-mori.net/
5	あきる野菅生の森づくり協議会	http://sugaomori.main.jp/sugaomori/index.html
6	狭山丘陵の森レスキュー隊	
7	NPO 法人　三浦半島生物多様性保全	http://mbcn-m.com/hp/
8	NPO 法人　竹林救援隊	http://www.geocities.jp/tikurinnkyuuenntai/00index.htm
9	麻機自然体験コミュニティ「Balance」	https://www.facebook.com/BalanceAsahata/
10	特定非営利活動法人　海上の森の会	http://kaishonomori.com/
11	伊賀の里山整備・利用を考えるグループ	http://www.iga.mie-u.ac.jp/a4seminakennkyuu.html
12	山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会	http://www.digitalsolution.co.jp/nature/yamakado/
13	京丹後木の駅実行委員会	http://www.facebook.com/263603787149010
14	河和の森　保全の会	
15	NPO 法人倭文の郷	http://www.sitorinosato.jp/
16	美鈴恵みの森づくり	http://misuzunomori.jugem.jp/
17	白木谷ゆめクラブ	http://sirakitani-yumeclub.webnode.jp/
18	金剛山もととり保全協議会	
19	駄留地区鳥獣被害対策協議会	
20	知覧町たけのこ振興会	